

学 習 誌

連 合 体

(第 2 号)

日本大学全学共闘会議
神 田 地 区

目次

○ 第一回日大神田地区政治集會に寄せて	二〇
○ 第二回日大神田地区政治集會に寄せて	二一
○ 叛軍斗争勝利総決起集會に寄せて	二二
○ 日大神田地区よりのアピール	二三
○ 全共斗運動の今日と我々の方向	二四
○ 三里塚斗争へのアピール	二七
○ 出入国管理体制粉碎に向けて	二八
○ 新らしい素晴らしい同志へ	二九
○ 追記	三〇
○ 付記	三一

第一章	基本路線	二
第二章	今日の活動方向	四
(一)	非合法拠点設置	五
(二)	中心核と組織	五
(三)	地区解放斗争―全局の斗い	七
第三章	理工学部同志より	七
(一)	はじめに	七
(二)	我々は勝利する	九
(三)	帝国主義大学体制解体	一一
(四)	問題意識バンザイ	一三
(五)	新らしい時代に向けて	一三
第四章	新らしい斗いを構築せよ	一四
(一)	地区解放斗争に関して	一六
(二)	地区解放組織の確立	一六
(三)	焦点斗争・中権斗争に関して	一七
第五章	民主集中制に関して	一八

第一章 基本路線

場所的学内合法拠点（学内の合法的な組織の活動場所）を保障すべき人的学内合法拠点（学内の合法的な組織）自治会・ゼミ・サークル・クラス等）の形成・確立。

然し、この運動は吾々の経験に現われた様に古田秩序内の運動としてしか保障されえない。それ以上の運動をなす場合、つまり古田秩序を破壊し、吾々の秩序を作り出す運動として組織を動かす場合、合法組織としてある事を自ら打破しなければならぬ。その事は六七年三崎祭斗争の批判的総括の中に現われる。つまり合法組織それ自体は合法内でしか動きえず、結局の処古田体制内のポツダム自治内（今日的には帝大体制強化状況内）の運動としてしか成立しえないという事である。そこで吾々は学内秩序を集約する為には是否とも合法組織より非合法組織化の作業が必要となって来る。合法組織から非合法組織への移行は、今日の帝大体制強化の時期にあって広範な部分に於いて感性的ではあれ必要視されている。六八年四・二〇はその必要性が運動を共なった現実として現われたものであり、合法組

織（自治会・サークル等）が合法組織活動場所を求めつつも結果として非合法組織活動場所を作り出したものであった（五階ヤンパス？における無届け集会）。この一種自然発生的にも見える形態の中に現われた経験、非合法組織活動場所の場所的・二一以降、運動の中でみごとに開花した。合法組織活動範囲は帝大体制の強化する中においてはより縮小していく事を三崎祭・四・二〇は教えている。以前の活動を求めて合法組織が動く時、その組織は動くと同時に非合法化する事を強いられるという事を。

こういった中で五・二一以降、非合法組織は自らの活動場所としての場所的非法拠点を力をもって作り始める。バリケードは非合法組織（斗争委）が作り出した場所的非法拠点の形態である。人的学内合法拠点の非合法化↓場所的学内非法拠点を作成の図式がここに成立する。合法拠点到集約される部分はそのままでは合法拠点構成員としてしか存在しないが、非法拠点到集約される部分は非合法拠点構成員として集約しうる。九・三〇はまさにそういったものとして存在した（吾々はそういった場として存在させるべきであった）。

要約するならば、場所的学内合法拠点（学内の合法的な組織の活動場所）を保障すべき人的学内合法拠点（学内の合法的な組織）の確立追求の中における人的学内拠点の非合法化と、場

所的学内非合法拠点作成」という図式である。この一連の図式を帝大体制解体作業という。つまり、帝大体制が強化されていく中で、それを阻止する運動として活動場所獲得作業が発生し、その運動は大学体制を仲間に解放していく、つまり秩序を仲間の手に集約していく方向に動いていくという一連の作業である。

さて、この運動の中で吾々は帝国主義者に不可避的に対峙する。帝大体制強化・確立対帝大体制解体・解放という形で対峙する。十・一佐藤発言以降の権力介入はこうして開始される。

その結果吾々はこの帝大体制解体作業を勝利的に推し進める為には、権力側の弾圧を分散せねばならないという命題を導き出す。十一・二一以降の全国大学斗争との結合、一・一八―一九以降の政治斗争（そういった言葉があるとすれば）への介入は一面においては（学外状況の流動化をなし、日大秩序集約の勝利的展開を計るという面において）正しい。「日大斗争の全国化を」というスローガンも又、そういった必要性の中で出されて来る。地区組織作成―地区結合―地区解放―全局の斗いという図式が要求されて来たのである。

しかし、地区解放斗争は帝大体制解体のスローガンでは成立しえない。今日の大学は矢張り多くの仲間に解放されてはならず、この矛盾は一般的ではなく、学生は多く働く仲間、抑圧する部分でしかないからである。東大を吾々が解体していった時、多くの働く仲間が喜んだのは、その斗争内容に対して理解した

というよりもむしろ、働く仲間達にとって今日の東大が手の届かない所にあり、エリートで・働く仲間を抑圧するいやな奴らが生み出されている東大が「見るも無惨な胸のスーッとする」状態になったからといった方が正しいだろう（この中に帝大体制の内容があり、秩序集約とは働く仲間にとってより良いものへと大学体制を解放していくという事でもあるのだが）。日大においても「大衆的だ？」といわれながらも矢張り、その矛盾は特殊でしかない。地区解放のスローガンはその地区の多くの働く仲間にとって共通したより一般的で、より具体的なものではない。その意味で吾々は今後積極的に地区に入り込む必要があるし、その過程で「階級形成」というものを頭の中だけではなく、姿勢として学ぶことが出来るであろう。「多くの仲間の中に入り込み」という事はこの事であり、今後吾々はその多くの地区・多くの仲間の中に入り込み、地区における矛盾を導くべくあらゆる調査を行なう必要がある。

以上の中から吾々は学内秩序を集約する為には帝大体制解体・地区解放―全局の斗いの二本の柱が必要である事を導き出した。そこで次に吾々は地区解放斗争の面より大学斗争の意味を導き出す必要が生じて来る。帝大体制解体・地区解放―全局の斗いの図式を地区解放―全局の斗いの面より見る必要性がある。

地区解放斗争（例えば基地斗争のような）においては、地区

解放組織（例えば三里塚・芝山反対同盟）が自らの土地（もつとも権力側にとっては彼等の土地）を自らに解放すべく闘いは展開される。即ち、権力側にとって非合法的な（もつとも、今まで用いていた非合法という言葉はそういった意味で用いていたのであるが）地区組織が、権力側にとって非合法的な活動場所（今日においては自らの土地を自らが用いるという事が権力側にとっては非合法的なのである）を求め、獲得するものとして成立するのだが、権力側がその様な非合法組織の拡大をゆるすべくもない。今日学内での吾々の非合法組織拡大作業の困難さを考えるまでもあるまい。であるから、地区解放斗争を發展すべく非合法組織の拡大を計るには是否ともそれを受け入れる場所が必要となつて来る。そういった場を、つまり、地区解放の戦術を導き、組織を拡大し、集約する場を吾々は地区解放拠点と呼ぶ。大学も又、その拠点の一つとしていかなければならないだろう。以上が地区解放―全局の斗いの面より見た大学斗争の意味性である。この事は新宿西口広場がかって非合法組織によって非合法組織の活動場所となつていった時、同時に西口広場が帝国主義体制強化阻止の地区的拠点として成立していった事を想起すれば良いであろう。西口広場のフォークソングが権力は恐ろしかったのではなく、権力の秩序の及ばない仲間の秩序集約が一定程度なされている場が出来る事が、地区解放拠点化する事が恐ろしいあまり、権力は西口広場の非合法組織に

対して弾圧を開始した。大学にあっては学内秩序を吾々側に集約する作業と同時に、大学を拠点化する事が地区秩序集約を勝利的に推し進めようものとなる事を恐れ、権力は六九年一月以降、大学立法を出してまでも弾圧を加えて来たのであり、吾々はそういった地区解放拠点として学内秩序集約を計る中で同時に大学を作り上げていく必要がある。

以上の事、つまり、地区解放斗争勝利―安保・沖縄斗争勝利（全局の斗い）・帝大体制解体（学内秩序集約）・地区解放拠点奪取が、五〇〇日に渡る日大斗争の経験の中で導き出しえた教訓であり、大学斗争の総路線である。

第二章 今日的な活動方向

吾々の学内活動が彼等の秩序を破壊・攪乱させ、それが長期的な力量構築と相まって、集約の方向に進む時、彼等は吾々の学内合法拠点の存立すらゆるさない弾圧を開始し始める。その弾圧状況は学部における古田支配の確立状況によって各々の相違が生じる（理工学部等）。又、その弾圧形態が彼等の教育・医療資本蓄積過程（機構等）に障害となる場合、多くその弾圧

形態は取り除かれる（医学部等）

医学部において吾々は感性化した怒りを集約し切れないまま、事後逮捕―試験強行―処分（十八名）の弾圧の中に後退を余儀なくされた（中心核と組織―非合法拠点の問題の克服）。試験強行―広範なボイコットといった明確な・具体的権力に対する秩序の破壊・攪乱―集約方向の提起をなさなかった（彼等の秩序回復の作業に対し放棄し、吾々の秩序集約の為の作業を開始する）。

法学部に於いて吾々は人的非合法拠点の保障のないまま、破壊・攪乱を行ないつつ、その流動化を単に次の運動の場への移動をもって解消した（秩序集約の内容と方向の提起）（合法拠点―非合法拠点・地区結合―地区解放の問題の克服）。

以上の医学部・法学部の例に現われた様に、六九年日大斗争は場所的学内非合法拠点奪取―弾圧―場所的学外非合法拠点の繰り返しの中で後退という状況をしていした。その要因をまとめ上げるならば、（一）場所的非法拠点奪取の為のみの組織化、（二）感性的認知より論理的認識への転化の欠落、（三）彼等支配者側の体制の定着・確立の中で展開された一本化された弾圧、その中に於ける軍事的敗北。以上の要因を克服すべく。

（一） 非合法拠点設置

機動隊導入―ロックアウト―活動家の閉め出し―右翼弾圧下

の授業強行の中で何故吾々は後退を余儀なくされたのか。非合法組織（権力側から見ただけ）が非合法組織活動場所を求める運動それ自体は常に正しい（もっとも権力側にとって見ればその反対となるのだが）。だが、如何にしてその様な場を作り上げて行くかである。日大の弾圧形態が当局の教育・医療資本蓄積過程（機構）にとって障害となった場合、その弾圧形態が取り除かれる事を吾々は経験的に知って来た。この事は今日の帝大体制にとって私学に於ける最大の弱い環である。彼等はお客を逃がす事が出来ない。どうしてもしかたない場合に限り彼等は処分（お客の取り逃がし）を行なうのである。又、彼等は良いお客をつかまえる為に学内合法活動を一定程度認めるし、そうする事によって帝大体制を一面に於いて強化する（活動内容が右翼的であれば、その組織活動は帝大体制強化の面に於いてより良い方向だからと彼等は考える）事が出来るからである。

合法拠点をを用いて合法組織を拡大せよ。帝大体制強化阻止をなすべく拡大せよ。合法拠点を拡大せよ。非合法拠点化として合法拠点を拡大せよ。その運動の中で非合法組織化を拡大せよ。中心核は非合法化を仲間と協力して積極的に推し進めよ。以上が学内に於ける当面の活動方向である。

（二） 中心核と組織

七〇年日大解放斗争へ向けて、多くの仲間と共に吾々のすべ

き事は、仲間と共に団結し、より多くの仲間と連合し、より良き闘い方を導く事である。その為に吾々は次の事を行う必要がある。

吾々の回りにある全ての状況を調査し、斗争の中で経験した全ての事象を分析して得たものをもって、かつ具体的な日大斗争を媒介とした「吾々は大学を如何なるものに近付けるのか」と言った命題を勝利的に推進する為には今ある状況の下では如何なるやり方を基にした闘いを組めば良いのかという事を真重に導き出す事である。その為には至る処に存在する、そして今日学外に存在する全ての経験豊かな仲間と協力して、民主集中制をもって事に當って行く他にはない。

吾々は一番仲間の為に良い、仲間の事を常に考え、より多くの経験を積んだ仲間を中心に置き、信頼し・団結し・勇気をもって、これから始まる日大解放斗争を推し進めて行かなければならない。吾々は、吾々が導き出した仲間である良き姿勢（仲間の事を考え、仲間をまとめ、多くの経験を積んだ、常に原則活動を行なうという仲間の為の日常生活姿勢）をもった中心部分を助け、共に仲間を信頼し、まとめて、より拡大し日大解放へ向けて全ての仲間と連合して行かなければならない。仲間の中心部分は常に自らを謙虚に保ち、仲間の事を常に考え、仲間の解放に向けて、団結と連合を計り、より良い闘い方を民主集中制に基づいて導くよう努力しなければならない。

以上の事を確認した上で吾々は、信頼し・団結し・勇気を持って、全ての仲間と連合して七十年日大解放の力を準備し、開始し始めなければならない。

今日、具体的に吾々は七十年日大解放へ向けて力強い歩みを始めるのだが、その開始するに當って吾々は再度次の事を確認する必要がある。

「一」 吾々の回りには至る処に多くの経験に豊かな仲間がいて、吾々が信頼し、謙虚な姿勢で接するならば、仲間も吾々を信頼し、日大解放の為に良い方法を仲間の経験から教えてくれるという事。

「一」 吾々が「やる」といって、やらない」「出来ない事を出来るといふ」そういった仲間に対して小手先の誤謬化をしないうならば、仲間は吾々を信頼してくれ吾々と共にスクラムを組むという事を。

「一」 吾々が頭でっかちににならないで常に姿勢を重んずるならばダラ官を生んだり、組織の固定化を生んだり、仲間にとって障害となるようなものを生まないという事。

以上の事を「絵に書いたモチ」ではなく「地についた、仲間の眼に見える実際のもの」とするには、吾々が日常生活姿勢をいましめ、実行していく事である。

最後に、多くの仲間が七十年解放の闘いを経済学部において実行すべく、解放出来るという信念と勝つ為に仲間と固くなし

た団結と、右翼にブチ當って行った勇氣を、七十年を向えるに當って新たにして、七十年解放・斗争委建設をなして行く事を要請すると同時に学内・学外の全ての仲間が吾々に連合する事を期待する。

(三) 地区解放斗争—全局の斗い

〔一〕 帝国主義体制が強化されて行く中で、地区・部門・階層に於いて諸々の矛盾が現われて来ている。吾々はその矛盾を個別改良課題に現わし大衆斗争を展開する中で、その矛盾が何より導き出されているのかを相互学習しつつ、帝国主義体制強化阻止→諸体制解放(Ⅱ諸戦略配備体制を仲間の側に解放する)の斗いの質を引き出す必要がある。その中で地区解放の斗いを日本解放の方向をもつてなして行かなければならない。

〔三〕 吾々は具体的媒介物(諸要求として現われる)をもつて仲間の感覺的不満を具体化し、仲間の蜂起をうながし、実力部隊を配置して大衆運動を展開しつつ、仲間の下に秩序集約をなすものとして、地区解放斗争を展開して行く必要がある。

〔三〕 十一・十六・十七に於いて権力側は具体的媒介物(暴力学生の手より街を守れ)をもつて商店主を始めとする本来吾々の同盟者(帝国主義体制強化阻止→解放の)となり得る都市小ブルジョワ層を彼等の側に組み入れる事により、蒲田に於ける秩序を権力側に集約し、吾々の孤立を計った。

吾々は六七年羽田斗争以降、佐世保、三里塚、王子と続いた、そして全共斗運動に現われた良い面と悪い面を見きわめつつ、地区解放→安保・沖縄斗争を展開して行かなければならない。

〔四〕 地区解放→総反乱の斗いを導く中で帝国主義者を包囲セン滅する。中央権力拠点奪取・一点突破の斗いの中で帝国主義者に包囲セン滅されるサイクルよりの脱皮、この事が地区解放斗争の命題であり、吾々は以上の中から安保・沖縄の斗いを各地区に於いて今日展開して行く必要がある。その為に吾々は各地区の諸矛盾を導き出し、それを具体的媒介物として広範な戦線を準備しなければならない。

第三章 理工学部同志より

(一) はじめに

レーニンによれば「革命理論なしに革命運動は有り得ない」と述べられているが、キューバ革命はこの最もオーソドックスな革命運動の前提条件を否定し続けるユニークな革命である。社会的真理の表現としての革命理論は如何なる革命宣言にもま

さるというべきだろう、たとえ論理が知られなくとももし歴史的な現実が正しく理解されさらに包含された力が正しく有効化されるならば革命は成功するといふべきである。全ての革命は非常に異なった傾向の要素を内在させている。がしかしそれらは行動において、また革命のもっとも直接的な目標において一致している。(ガバラ)

日大闘争それは我々に直接的経験としての闘いの本質をはっきりと提起している。この現実を真剣にとらえようとはせず、まじめに自己の問題とせぬままに、世界革命の戦略戦術^{etc}と言う一定程度のベールをかぶった革命理論なるものの暗記又はそののみの一面的理解へと、闘いの認識総体を横すべりさせる中で自らの闘いにかかわろうとしたり、闘いそのものをそういった窓の中からのみ見ようとしている悲しき傾向に対して、あるいは闘いの停滞にあって自らを革命理論のこねまわしをもってその苦しみから回避しようとする傾向に対して我々ははっきりと我々の闘いの中で警告を発するだろう。

一九六七年十月八日山崎君を始めとする多くの学友の非妥協実力闘争をもって闘い抜かれた佐藤訪ベト阻止羽田闘争は、第一にそれ迄の戦後民主主義という(六〇年安保そして六五年日韓を闘い抜く中で突破出来えなかった)壁を突破する方向性を具体化したという意味に於いて、帝国主義者の秩序を破壊攪乱するといふ闘いを組みえたという意味に於いて、歴史的な位置

を示している。そして第二にその闘いはいわゆる全学連と言う名の下に闘われたかもしれないが、しかしそれははっきりとセクトとして荷った闘いとしていたという事である。そしてその帝国主義者の秩序の破壊と攪乱をセクトの部隊がやりぬいたと言う事は、その後の佐世保・王子・三里塚^{etc}の闘いの中で大衆の流動化(日地区諸要求を媒介とした多くの闘う仲間の出現と、ポツダム体制の破産の提起を通じた一定程度の左右への分解)と、いわゆる市民の闘いの場への出現と言う大きな成果をおさめた。が、その事は同時に一つの危険をも含んでいたのである。つまり闘いの中に於ける大衆の流動化によって生じたプールから如何にしてセクトがうまいエサで人員をセクトに釣り上げ、再度闘いを組んで行くかと言う闘いの形式の固定化裏返しの大衆蔑視が存在し、又大衆引き廻しがあったという事である。そしてその釣り上げられたセクトの部隊は次の破壊・攪乱の闘いへと投入されていき、そこではたとえば学園闘争は政治闘争を闘う部隊を作る為の闘いであると言った様な学園闘争に対する反革命的な位置付けさえ成立させていった。その様な闘いの限界性は全学連の崩潰^{etc}の中にはっきりと露呈されその様を闘いに、その様な傾向に答えを出しつつ展開された闘いこそ日大闘争であり全共闘運動ではなからうか。

日大闘争、それは一九六八年五月二十一日秋田明大君を先頭とする二〇〇メートルデモをその一つの突破口としつつ直接民

主主義と非妥協実力闘争の二本の大きな柱を持った闘いとして闘い抜かれた。その闘いは古田体制の秩序の破壊・攪乱としてありながらも、九・三〇大衆団交をメルクマールとして、過去の学生運動史上に於いて闘う側から作り出していた壁、すなわち大衆集約という問題に打ち向かっていった。しかしながら九・三〇以降、十・一佐藤発言を契機に敵が明確にならないまま（明確にさせないまま）十・十一月を古田がやめる事を待っていると言う受身の闘いとしてしまい、かつそれまでの壁を同じ方法で打ち破ろうとするつまり政治闘争への乗り移りという方針に一定程度集約させてしまった。我々は今その当時の力量問題を自己批判的に総括し、今こそ新しい闘いを組まなければならぬ。

我々は日大闘争の直接的実践の中で我々自身の闘いの本質をも我々がとらえ返している事を知らなくてはならない。

五〇〇日以上の日大闘争はその数々の経験の中に無限の可能性を秘めている事を誇ろうではないか。今こそ我々はその今までの闘いを踏まえる中で、我々の新しい一步をあゆみ出さなくてはならない。

(二) 我々は勝利する

下降的断絶の克服を回避して七〇年に向う事は出来ない。個別闘争を放棄する事は出来ない。個別闘争を徹底的に追求し、

ぎりぎりの所まで持って行く事により、運動の波の発展と大衆性があり得るし、全体の闘いの地平が切り開かれるのである。その過程を非妥協的に、かつ不断に追求する事こそがその時点・時点での権力に対するわれわれの側の最大限の総反撃なのである。△秋田明大V

我々の闘いはその当初、日大古田体制の二〇数億円にも及ぶ使途不明金、そしてそれに対する「古田は悪い奴だ」と言う怒りをその中に大きく含みつつ出発した。そしてそれは秋田明大君を先頭とする二〇〇メートルデモを一つの契機として、大きなうねりとしてもり上って行った。我々はまずその中にその二〇〇メートルデモに凝縮した形でそれまでの苦しい数年間に渡るいわゆる地下活動とその中で政治的に圧殺されていった多くの学友の血で描かれた苦しい闘いを忘れてはいけぬ。

一九六〇年安保闘争に於いて国会を包囲した数万の学生・労働者の隊列の中で、小さくも真赤な日大の旗の下暗黒の日大にもどって行ったのではなからうか。そこには一九五八年日大改善（悪）案なるものをメルクマールとして、（文理学部等の体連支配の強力な学部には学友が学生服を着て登校して来なかったと言う理由で応援団員にリンチを受けると言う様を）、徹底した暴力支配と、古田を頂点とする古田体制なる超近代的支配が着々と構築されていたのである（いわゆる総合大学院大学構想もこの頃早くも語られていた）。

そしてその様な支配の中にあつて文理学部に於ける数学科闘争・一九六五年日韓闘争を前後しておこつた六時限制闘争、全学的な闘いとして一定程度闘い抜かれた応援団闘争等々の苦しい闘いを経る中で、文理学部に於いては数学科の闘う学友、そして教職員のバースと同時に学生運動家の拠点として存在していた東京学生会館（その後権力によって強制とりこわしになつた）に下宿していたという理由によるT君への弾圧等多くの苦しい経験を経る中、非合法公然の闘いが生まれつつ、一九六七年四月二〇日の経済学部に於ける闘い、そして一九六七年十月八日の闘いが成立し、かつその内容を凝縮した形で一九六八年五月二十一日の二〇〇メートルデモが開始された。我々は常にその様な苦しい闘いに於ける経験をより学びつつ現在の闘いを組んでいかなうてはならないだろう。そしてだからこそ日古田体制打倒の闘いは單純に悪漢が古田であり、それを退治する正義の味方が全共闘であるという様な闘いとしては存在していない事をはつきり我々は確認しなくてはならない。

五月二十一日の二〇〇メートルデモに至るまでの数々の弾圧を古田はこんなに悪い事をしたのだし帝国主義者は常にこんなに悪い事をして来たのだと羅列して語る事は必要かもしれないが、然しその事を強調する事の中に一つの危険が存在する事を我々は知らなくてはならない。

文理学部の数学科の学友を、T君を、法学部のN君を、そし

て多くの学友に対して処分を含むあらゆる弾圧をしたのはあの憎むべき古田体制であるが、同時に我々がその弾圧を許さざるを得なかつた事も事実ではなからうか。そうだからこそ我々には多くの学友の闘いを持って答えて行かなくてはならないだろう。

日大闘争は「古田は悪い」と言う所から出発した。それ故、我々はそれを退治するのだと言う中で思い上がりがあつた事をも素直に認めなくてはならない。以上の事を踏えるならば日大闘争は同時にその様な重要な問題を提起し、かつ特殊の矛盾と同時に普遍的矛盾をも我々の直接的経験の中で提起していると考える。我々は日大闘争を徹底的に闘い抜く中で普遍的矛盾への肉迫と同時にその地平からの特殊矛盾に対する我々の認識の前進をも我々のものとしていかなうてはならない。

現在帝国主義者は七〇年代をメルクマールに安保自動延長という一つの骨組を作りつつ、国内を帝国主義的に支配しつつとしてゐる。国内のあらゆる末端まで、工場に・学園に・家庭にその支配を貫徹しようと今帝国主義者はあらゆるマスコミニケーションを総動員している。それによって自らの延命の道を作ろうとしている。我々は決してその事を許してはならない。我々は帝国主義者が支配しようとして必死になつてゐる一つの末端にあつて、我々の闘いの中で我々の秩序の下に大衆を集約していかなうてはならない。帝国主義者の国内に於ける彼等なりの総力をつぎ込んだ末端までの支配があるならば、我々

はあらゆる細部に於いてのろしを上げその支配に待ったをかけつつ我々の秩序の下に集約していかなくてはならないだろう。

そして我々はその様を闘いの中で、我々の内なる帝国主義をも打倒する方向性を持って闘い抜いて行かなくてはならない。

今、我々の集約の力量は理工学部七号館の一つのクラスの秩序を集約するのがやっとかもしれないが我々はその事を誇らなくてはならないだろう。我々は帝国主義者の支配が古田体制の支配が貫徹出来ない我々の秩序をたとえ小さくとも作りうるからである。考えてもみたまえ、日大内的に見ても国内的に見ても我々に集約されるべき量（質も含める中で）帝国主義者にくらべて圧倒的に多いではないか。我々は長期的には、はっきりとその事を樂觀的にとらえつつ、現在の秩序集約を七号館全館に・理工学部全館に・日大全学に・神田地区に広げて行く作業を革命的警戒心をもって緻密に行って行かなくてはならない。我々は現在の闘いをより緻密に、より徹底的にやり抜かなくてはならない。恐れる事はない。万難を排して事にあたり、一つ一つ我々の下に秩序を集約して行く中で帝国主義者との緊張関係を持ちつつ、現在の闘いをより深く、より広く構築して行くのではないか。常に敵は強大であるかもしれないがしかしそれ以上にそれを数千倍も上まわる味方を我々は作りうる事が出来るのだ。闘いの徹底化を。闘いの日常化を。秩序の集約を。我々は勝利する。

三 帝国主義大学体制解体

日大闘争は、たんに日本大学をどのように改良するのか、といった問題として闘かわれたものではありません。それは日大十萬の学生がプロレタリア予備軍として存在している。そういった自己の存在そのものを主張していく形に於いて闘われたのです。

その日大は、いわゆるポツダム自治会すらも許容しない様な古田体制を確立しており、しかもそれが単に戦後の民主主義の過程をいまだ確立していない。おくれた日大として存在しているのではない。むしろ日本のブルジョアジーが戦後にたどった戦後民主主義、そしてそれを通じての反体制運動の体制内化、その上に立って、帝国主義的な支配を貫徹して行くと言ったルートが欠落されたものとして日大があったが故に、古田体制と言う超反動体制との闘いは、きわめて先進的になったわけです。それ故に全共闘の闘いは、はっきりと七〇年代の帝国主義の大学体制との闘いの原型と言うものを構築して行ったと言えると思うのです。△山本義隆▽

一九六〇年安保条約以降、いわゆる高度経済成長政策の中で国内に於ける垂直分割をメルクマールとしつつ強化拡大された日本資本主義（円）は、一九六五年日韓条約を基盤に韓国を中心として東南アジアに対する帝国主義的侵略（円の投資の強化

等)を開始した。その一方国内に於いてはその総体を帝国主義的に再編すべく、その一つの重要な環である所の教育の帝国主義的再編を目的意識的に追求して行った。とりわけ一九六五年を前後して出された教育免許法・期待される人間像・大学設置基準等々の教育に関する法律等々の中で、帝国主義者はそれを実体化して行ったのである。つまり教員免許法に於いては小学校・中学校のいわゆる義務教育の教員養成の為のはっきりとした目的性を、表面的には名称を学芸学部と言う名から教育学部へと改める中で、義務教育を担当する教員を帝国主義者側のイデオロギーをもって貫徹させて行く事をもくろみ、期待される人間像に於いては中学校・中学校・高等学校の生徒を対象とした帝国主義者の要求する労働者を作り出して行くルールを幼稚園から高校まで貫徹させていったのである(いわゆる家永教科書問題もこの当時起こった)。そして一方大学設置基準に見られる様に、それまで一般教養課程に於いて自然科学、人文科学、社会科学の三部門に渡ってそれぞれ十二単位取らなくてはならなかったものを、その三つの部門の壁を取り除き、たとえば理系に進む学生なら自然科学三十単位とりあとは語学六単位取ればよいと言う形にしてより無内容にする中で無内容で技術のみをある程度知っていればよいと言う様な労働者を作り出して行く、つまり教育総体に於いて垂平分業体制にベッタリの労働者を作ろうとしたのである。

が、しかし、六五年以降日本帝国主義の弱さの表現としての海外侵略は東南アジアに於ける革命と反革命の闘いを反映しつつ強化されていき、かつそれは国内に於ける産業の垂平分割から垂直分割への目的意識的改編と同時にいわゆる「日本は大国である」という形の帝国主義侵略イデオロギーによる国内秩序集約と、それらをメルクマールとした所の国内の徹底した管理支配体制を構築する事を日本帝国主義者の至上命令としつつ展開されて来た。そしてそれは国内支配に於ける重要な柱である教育、とりわけ総仕上げ的存在としてある所の大学に集中的に具体化されたのである。

学内支配管理体制 国大協路線と言う支配を構築すると言う約束手形のもとに当局と権力のボス交の中で廃案となった大学管理法案は、六七年以降の学園闘争の革命的発展の中でその国大協路線がもろくも崩れ去ろうとする時、国内の帝国主義的総再編のその重要な環を大学に位置付けていた帝国主義者によって大学立法と言う形の死亡宣言をされたのである。垂直分割体制にベッタリの労働者を作り出し、かつ帝国主義侵略イデオロギーの構築と国内管理支配体制の確立の命題を七〇年代に向けて具体化する為には、一九六七―七〇年代の学生運動をなになんでも圧殺しかつ、その中で七〇年代のルールの基盤を構築して行かなくてはならないし、その実体化としてある大学立法は何がなんでも七〇年の前のこの六九年中に採決しなくては

ならなかったのだ。学生運動に対する軍事的圧殺・廃校閉校等の恫喝による学内の間接支配強化、そして七〇年代の教育の再編の爲の下地をその内容に含む大学立法は、だからこそあの様な形を取ってまでも強行採決されたのである。

現在権力はその大学立法をメルクマールに、東京大学で出された一般教養課程と専門課程を分離する内容を含んだ。七・四改革案・教育大学の筑波移転。日本大学の総合大学院大学構想等々に見られる様に教育と研究をはっきりと切りはなし教育に於いては垂直分割体制にみあった所の労働者を創る為の労働力商品に対する価値の付加、具体的には幼稚園から大学までの一貫した教育を行う中で、理系に於いては帝国主義侵略イデオロギーと技術を持った労働者を構築しかつ文系に於いては帝国主義的産業の研究開発部門として研究室を位置付け産業工程の一機構として大学の研究室を位置付けて行っている。そして大学総体としては一つ一つの大学に緻密な目的性を持たせかつ総体として大学体制を（国立大学に於いては東大を中心としつつ私立大学に於いては日大等々を中心とする中で）構築しつつ、大学総体を帝国主義管理支配機構の中にスッポリとかつ緻密に組み込む中で同時にそれを骨組みとしつつ帝国主義管理機構を強化して行くという帝国主義大学体制を今まさに彼等帝国主義者は作るうとしている。古田体制はその一環として具体化としてはっきりと存在している事を見抜かなくてはならないだろう。

現在以上述べた形で帝国主義者が学内支配を行なおうとしている事に対して、我々は帝国主義大学体制解体のスローガンの下に、学友を集約し学内秩序を集約する闘いをより徹底的に行なわなくてはならない。我々の闘いが全国学園闘争を闘い抜いているすべての闘う学友・そして三里塚の農民・そしてあらゆる職場で闘っている労働者・そしてその他のあらゆる闘う部分と赤い一本の糸で固くむすばれている事を確認しなくてはならないだろう。

帝国主義者が現在その支配をあらゆる末端まで貫徹する中で彼等の秩序を構築しようとするならば、我々は帝国主義大学体制解体という大学闘争に於ける戦略課題を高々とかかげて学内秩序集約の闘いを断固として組んでいかななくてはならないだろう。

(四) 問題意識パンザイ!!

我々はあらゆる場所であらゆる時限でそしてあらゆる状況で問題意識を常に持ちつつ事態にとりくまなくてはならない。日大闘争はその中に無限の可能性をひめているのではないだろう。個別闘争の限界性とか等々の修飾語を使用する中で展望がないと語る時、そこには自ら日大闘争にわく組みを付けてしまっている思考があるのではないだろうか。そして又展望がないと言うその言葉を言う時点において、日和見と合理化が始まる

のではないだろうか。日大闘争は、その闘いの中にその闘いを自らの生の表出としてまじめに自らのものとしてすなおに受け

とめるならば、そこには無限の可能性があるだろうし、我々はその可能性を追い求める意味でも、常にいかなる状況に於いても自らの問題意識を持ちつつ闘いにかかわっていかなくてはならないだろう。日大闘争は日大の校舎に入った所から始まるものでは決してないはずだし、日大古田体制は決して校舎の中のみが存在するものではないはずだ。我々は日大闘争をまじめに闘い抜く中で闘いを常に日常化しなくてはならないだろう。そしてその事を確認する中で、我々は我々の参加するあらゆる集会・あらゆるデモ・あらゆる闘いの場に自らの問題意識を持ちつつ積極的に参加して行かなくてはならないだろう。単に集会があるとか単にデモがあるからと言う理由に於いて集会に参加する時、そこにその行為に対する自らの責任放棄がある事を我々は知らなくてはならない。我々は常にあらゆる所であらゆる時限で自らのその時点に於ける問題意識を持ちつつ、あらゆる経験を自らのものとし、血として肉として自らをきたえ上げていかななくてはならないだろうし又、それを抜きにして革命の幻想を追いかける事は大衆に対する犯罪ではないだろうか。我々は常に自らに、そして闘いの総体に対して問題意識を持ちつつその中からの徹底した討論を媒介に客体を主体にきたえ上げて行かなくてはならないし、それこそ闘いの日常化ではないだろう

うか。そしてその中ではっきりと連帯を構築して行こうではないか。

(五) 新しい時代に向けて新しい闘いを構築せよ

革命が必要であるのは、単に支配階級が他のどんな方法によっても打ちたおされえないからだけではない。さらに打ち倒す階級がただ革命に於いてのみ、一切の古い汚物を払いのけて社会の新しい樹立の力を与えられる様に成りうるからでもある。

△ドイツ・イデオロギーより▽

一九六七年十月八日羽田闘争のその地平は日大闘争の中に受け継がれつつ、今我々は歴史の新しい段階に突入しようとしている。帝国主義者は七〇年代をメルクマールとしつつ、帝国主義管理支配体制のもとに日本国内の総秩序を集約しつつ、七〇年代の日本帝国主義の帝国主義としての海外膨張を着々と押し進めつつある。そして現在我々はその中において一九六七年以降の闘いの数々の失敗を学ぶ中で、一つ一つの状況に応じた形での我々の我々による秩序集約をして行かなくてはならない。例えば日大理工学部と言う一つの単位の中で見ても、機械科のクラスと物理科のクラス、機械科闘争委と物理科闘争委とは必然的に状況には違いがあるだろうし矛盾の実体化も違いがある。そしてその違いに応じた機械科闘争委・物理科闘争委なりの解決をして行かなくてはならないと同時に、それはその数々

の経験をお互いに徹底的に討論する中で（よりお互いを深化させつつ行つて行く中で）それぞれの作業を緻密に大団に行い、かつそれを機械科と物理科にとどめるのではなく理工学部総体に波及させる中で理工の総秩序を我々のもとに集約して行かなくてはならない。

大衆が現在真に望んでいる事は何であるのかと言う事を、我々は今こそより大衆の中に入り自らの問題としてとらえ返しつつ方向性を出して行かなくてはならない。我々は何時、いかなる闘いに於いてもそれを荷おうとするのならば大衆に断固として責任を持ち大衆を徹底的に立ち上げさせなくてはならないし、その闘いを我々は日常化しなくてはならないだろう。我々は今までの軍事至上主義的な闘い、活動家レベルの自己満足の闘い等々の多くの失敗の中から、その失敗を二度と繰り返さない為にも、多くを学び取り大衆の中に入り大衆を集約して行く新たな闘いを組んで行かなくてはならないだろう。

我々は主観的に展望を作り上げそれをもって自らの空気入れを行つて闘いを組むとか、理論を固定化してそれを実体化せんが為に闘いを組むとかいった様子を誤りをおかしてはならない。我々はより多く大衆に学ばなくてはならないし、その中から新しい秩序集約の闘いを組んで行かなくてはならない。例えば昨年（一九六九年）十月二十一日に於いて神田地区に権力によって市民の自警団なるものが作られた。日大闘争のその初期に於

いて一種の同情心も手つだつてかもしれないが、一応我々の味方として存在していた付近の市民が権力側に集約されてしまった。権力側の暴力キャンペーン等々があったからだ等々と言う理由を付けてこの事実を総括（合理化）する中に我々は危険を見出す。我々の闘いは神田地区に於いてはその様な市民までも我々が集約して行くといった方向性を持たなくてはならないし、一〇・二一権力によって自警団が組織化されそれがある程度権力側に有利な様に機能した事を我々は深刻に総括しなくてはならない。

我々のこれからの闘いは、より日常的に・より緻密に展開する中で、総秩序を我々のもとに集約して行く闘いとして組まなくてはならない。現在の理工の斎藤教授会秩序をマヒさせ我々のもとに集約して行く闘いを我々は日常的に行つていかななくてはならない。今理工七号館には我々にだけ見えるバリケードがある。それはある日は弱く又ある日は敵をまったく寄せつけない程強い。そして我々はこのバリケードを強化して行く中で、一号館そして理工全館を我々の秩序のもと集約して行かなくてはならない。その闘いはより深く、よりきびしいかもしれない。又すぐに表面化されて来るものでもないかもしれない。が然し我々は「明日に続く今日の闘いを歴史の中の一日としての今日の闘い」をやり抜く中で新しい時代を我々の側から切り開いて行かなくてはならない。我々はその東大闘争で語られた「連帯

を求めて孤立を恐れず、力及ばずして倒れる事を辞さないが、力尽さずして挫ける事を拒否する」と言う言葉を闘いの中で受けとめつつ新しい時代への一步を、力強い一步を今こそ踏み出さなくてはならない。

第四章 地区解放闘争に關して

全局の闘いは各地区に於ける闘いの総称であって、それ以上のもではない。吾々の全局の闘いを保障するものは、各地区に於ける普遍的な闘いであり、地区に於ける広範な戦線と、組織的団結勇敢な闘争形態（非合法実力闘争）である。各地区の闘いを最終的に保障するものは、それぞれの活動場所に於いて闘い抜いている中心核であり、活動者であり、地区非合法組織（地区解放を目指した）である。

七〇年代、地区解放—総反乱を目指して、今日吾々にとって主要な事項は日常的な永続的な地区に於ける解放闘争を展開し得る地区的非合法組織の確立と、永続闘争の提起であり、吾々は如何にしてその主要事項を克服して行くかという事である。

(一) 地区解放組織の確立

日本解放闘争の全局に渡って吾々は敗北の道を歩んでいる。この事は厳然たる事実として吾々の前に横たわっている。しかしこの敗北は政治的敗北ではなく、単なる軍事的なものでしかない。吾々はこの長期的な軍事的敗北の中にあって明らかな政治的勝利をおさめて行かなければならない。

東京地区にあって多くの地区解放組織は今なお中心核形成の時代を脱却し得ていない。吾々はそこから先ず地区解放組織形成を如何にして計り、かつ地区解放闘争をその中から如何にして提起して行くかといった問題より入って行かねばならない。多くの同志を地区解放組織へと集約するには、地区解放闘争を展開する具体的必然性と本質的必然性が必要とされる。本質的必然性とは安保・沖縄闘争、あるいは日本解放闘争を地区解放・総反乱をもって闘い抜くという必然性、各部門・階層にあって展開するといふ必然性の事である。しかし、地区・部門・階層で闘いを展開する場合、この本質的必然性のみでは闘争は一般化しえない。それは本質的必然性だけでは、安保・沖縄闘争を日本解放闘争を「何故」特定の地区・部門・階層に於いて展開するのかわからない「必然性」を導き出しえないからである。本質的必然性だけをもって闘いを展開するならば、その闘いは特定の学園・職場・地区を指定することは出来ない。もし出来

るとするならば「そこが帝国主義者との接点をより安易に持ち得る場であったから」という以外にあるまい。吾々にとって多くの同志を地区解放組織に集約するにはもう一方の「必然性」である具体的必然性が必要となってくる。

学園に於ける同志は、各大学の個別矛盾の中から闘いを通じて普遍矛盾を導き出し、それをもって、大学闘争の戦略課題とした。その時より大学闘争の永続化が開始された。彼等のスローガンである「帝大体制解体」は教育部門に於ける永続闘争の提起であり、地区解放闘争の一構成体である大学のこういった闘いは吾々の地区解放闘争に多大な勇気を与えた。そして同時に吾々の地区解放闘争に於いて必要とされる具体的必然性に対して解答を与えてくれた。即ち、地区解放闘争は、帝国主義体制が強化される中であって現われる諸々の矛盾を媒介としつつ展開されて来る。そして学園に於ける同志がなした事と同様に、広範な闘いの中にあつて普遍矛盾へと肉迫して行くのである。

このサイクルの中で始めて地区解放組織は拡大されて行く、学園に於ける同志が地区の諸要求課題を地区に入って行き導く必要があることを、地区に於ける学園闘争のみの孤立化を恐れる中より提起したが、吾々地区に於いて地区矛盾をスローガン化する事は重要であり、この事が地区解放総反乱の具体的必然性となつて、先に述べた本質的必然性と相まって地区解放闘争、組織確立の主要因を埋める事が出来得る。吾々は地区に於いて

具体的、本質的必然性をもって地区解放—総反乱を展開して行くのであるが、しかし、地区に於ける同志の組織力は今なお、弱くその組織力拡大が主要な命題となっている。

(二) 焦点闘争・中権闘争に関して

個別改良諸要求（帝国主義諸体制強化阻止）の闘いの外的保障としての全局の流動化をなすべく政策に対する、政治焦点的闘争を総反乱として展開し、それをもって大衆流動化を導き出し、その流動化を帝国主義諸体制強化阻止の地区的闘いへ集約して行く。そのサイクルを保障するものは地区解放の具体的必然性としての地区的矛盾で体型化したものであり、そういった地区解放闘争を媒介として本質的矛盾へ肉迫して行く中で、なおかつ地区解放の闘いを強化して行く。

だからこそ吾々の地区解放の闘いは地区的矛盾を必要とするし、それ無しに焦点闘争・中権闘争は、その生み出された大衆を再び焦点闘争・中権闘争へと集約する以外にないし、結果、帝国主義者に地区に於ける具体的必然性を矮小に先取りされ、吾々は地区秩序帝国主義者に集約されて行く中で包圍セン滅されて仕舞うだろう。

第五章 民主集中制に關して

一九六九年三・二五日法政大学に於いて、経法奪還日大全共闘集會が開催された。この日を境として、日大全共闘内部の一部のノンセクト間にフラクションが形成された。彼等フラクは、近日富に現われつつある全共闘内部の矛盾、ドグマ主義的、セクト主義的側面の強化と結果として現われる極左的な、小状況の無視化と、中央権力・焦点闘争至上主義的状况へのアンチとしてフラクを構築したのである。フラクが形成されるや、多くの学部に点在していたノン・セクトの活動家は同フラクに流れた。それは各学部・各学科に於いて論議された結論・運動論が何等全共闘會議に反映され得ず、結局の処、彼等活動家は無智な大衆であり、兵隊としてしか存在していないと言う矛盾、相互批判・相互学習の場の欠落と言う矛盾が累積されたものであった。

そのフラクは、六〇八月の夏を通じてセクトに対し個人的力量・集団的力量をもって、全共闘ヘゲモニーを奪還し、彼等の考えた直接民主主義なるものを全共闘内部に貫徹しようとした。

その為には彼等はセクト対抗理論の導き出しと、組織拡大を計った。その結果彼等も又、セクト化し、大衆より遊離し、現実の闘いを放棄して行つた。

吾々は今日このセクトを解体しなければならない。しかし、吾々は彼等フラクの努力を全て否定するものではない。確かに彼等はセクト対応の発想をもって基本路線の導き出し、組織拡大を行なつて行つた。だが同時に彼等はその過程にあつて多くの学友に助けられつつ、民主集中制の導き出しを成していった。基本路線の導き出しも又、この方法・即ち、小状況分析Ⅱ個別闘争の経験的総括の中からⅡ大状況の導き出し、個別矛盾の中から普遍矛盾への肉迫と言う方法を用いていた。

彼等の「帝大体制解体」はこうして導かれた。又、戦線拡大Ⅰ連合も闘いの必然性より導こうとした。情報交換會議Ⅰ連絡會議Ⅰ連合体のサークルはこうして導かれた。そして地区解放Ⅰ総反乱の路線も同様であつた。

今日、吾々は彼等の導いた「帝大体制解体」「地区解放Ⅰ総反乱」「連合体論」を成果点としつつ、彼等フラクションを解体しつつ、彼等が当初、導こうとした民主集中制を完成して行く必要がある。闘争内部に於けるルン・プロは反革命である。

彼等は自らが生存出来れば良いのであつて、団結と言う言葉も、解放と言う言葉も、彼等にとって見れば、自らを働かずに生存させる方便であつて、それ以上のものではない。自らの闘う基

盤があってもそれを放棄する者・解放と言う言葉で飯を食う者も又、リン・プロと同様に闘えば闘う程、闘争を内側より破壊して行く。連合体あるいは党・即ち日本解放を明日の問題として広範な部分によって組まれる組織は必要となるであらう。

しかし、問題はどうかやってそれを作り出すかであり、その中で民主集中制を保持するかである。

ここに吾々は組織論に於いても、小状況→大状況のサイクルを適要させなくてはならない。吾々は地区・部門・階層の諸要求課題を基にした活動者会議を構築し、運動を通じて諸要求（個別矛盾）→普遍矛盾へと進化する中で情報交換会議→連絡会議→連合体へと肉迫して行く必要がある。その中で吾々内部に在る、個人的力量・集団的力量によって民主集中制（らしきもの）を保持していると言う矛盾を解消していかなければならぬ。

末端に於ける闘争（諸要求闘争）を民主集中制に基づき展開している各活動者会議が、その闘争進展過程で普遍的矛盾へと肉迫していく過程に於いて連合の必要性を生じせしめる。その中で各闘争を勝利的に展開すべき経験的総括の必要性の中で各活動者会議の中心核間に於ける情報交換会議が設定されて来る。そしてそれは権力弾圧の分散と個別闘争の勝利的展開の必要性の中で連絡会議へと発展する。ついで連絡会議は種々の経験を積み中で一定の共通した普遍的矛盾をもった所の統一行動体を

目的意識的に追求し始める。連合体を目的意識的に追求し始めた活動者会議は現存している他活動者会議への連合を呼び掛け始め、かつ今猶、連合体を目的意識的に追求する処まで達し得ていない活動者会議へは連合体を目的意識的に追求し得る処へ達する様、闘争を外よりささえていく。又、新たな活動者会議を広範に配置し、運動を起こして行く様つとめ始める。こういった全局の流動化の中で、広範な活動者会議間に闘争の必要性の中から連合体が完成されて来る。

末端に於ける闘争（諸要求闘争）を展開している各活動者会議に於ける民主集中制を如何にして貫徹して行くのか、それは、集中→提起→分散の繰り返しの中で、相互批判・相互学習の場を保障し、闘争過程の必要性の中で普遍的矛盾へ肉迫して行く中で、理論進化を計る場を保障して行く事である。では、どの様に集中するのか、それは各小活動者会議間に於ける自他共に中心核として存在しうる部分をもって中心核会議を設定し、その下に諸経験を集中し、諸矛盾を集中するのである。

そして集中された諸経験・諸矛盾はより体系化され、再び全活動者に提起され、各少活動者会議へ分散されて、より進化されるのである。そして各小活動者会議で進化されたものは、それぞれの小活動者会議に於ける中心部分を通じて中心核会議に集中される。この繰り返し、集中→提起→分散の中で民主集中制は保持されていく。又、今だ小活動者会議が設定され得てい

ない地区・戦場・あるいは学園にあっては、連合を目的意識的に追求し始めた活動者会議より中心部分となりうる者を配置し、運動を通じて活動者会議を養成し、その過程で配置された部分を中心核として存在し得るか否かを新たに養成された活動者会議内で検証しつつ、集中―提起―分散のサイクルを実行していく事である。

第一回日大神田地区

政治集会に寄せて

信念・団結・勇気を!! 日大全共斗 経済学部活動者会議

一九六九・十一・一九

吾々が五百日に渡る斗争を通じる中で、今日、帝国主義者に対する闘いの質を引き出した結果、その引き出された敵が余りにも強大であった為に（吾々は、主観的にそうとらえた）一部の同志は斗争より去って行こうとしているし又、全体的に悲感が漂い始めている。確かに彼等は今日の吾々にとって強大な敵である。然し同志諸君、吾々は今と同じ様な状況を過去に経験しなかっただろうか。特に学部において斗争を展開する中で五月に至って古田が吾々の敵として出現した時、諸君は今と

同じ様な気持を味わったのではないだろうか。「まあ、なんてどえらい奴を相手にしたんだ。日本そのものを 達は相手にしちゃったんじゃないか」と。だが同志諸君、その古田も、吾々が、斗争を経る中で纏んで来た、「たいした奴じゃない」という確信をもって前進する中で、そして闘いに勝つという信念と、奴を追い込む団結と、奴に打ち向う勇気をもって徹底した日常斗争、永続斗争によって「たいした奴ではなかった」という事を引き出した。帝国主義者は確かに古田より「たいした奴」だし強力な敵である。だが奴等も古田と同様に、吾々が部門の闘いを全体の闘いと連結させながら展開する中で（それは日大斗争に於ける、学部の力を強化する中で古田打倒の闘いを押し拡げ、かつ、古田打倒の闘いを行う中で、学部力を強化して行く事と同じである）、大学を全ての仲間達に解放し、全ての仲間の為の研究・学習をなす場を築き上げ、日本の解放を勝ち取れるという信念と、彼等の如何なる弾圧の前でもヒビの入らない団結と彼等に打ち向う勇気をもって、全ての仲間の解放の為のイデオロギーと組織を養成する場に、そして解放の力強い拠点として、日常的に永続的に塗り変える作業を追求する中で多くの仲間と協力し、連合して帝国主義者を追撃して行くならば、彼等も又「たいした奴でない事が吾々の前に立証されるであろうし、そう確信する。

帝国主義大学体制解体・学内秩序集約！地区解放拠点奪取！

第二回日大神田地区

政治集会に寄せて

合法組織の非合法化を、斗う仲間の連合を!! 日大全共斗

経済学部活動者会議 一・十三

六八年・六九年日大斗争を斗い抜き、帝国主義者に迫る質を引き出す中から今日更なる斗いを組まんとしている経済学部の多くの学友諸君! 日大斗争は個別矛盾(二十億脱税問題・自治会弾圧等)に端を発したものであったが、大学そのものが今支配の一翼を荷なり重要な環としてあったが故に、必然的に帝国主義者との対決を余儀なくされてきたのであるが、そうであるからといって個別日大斗争を放棄する中で政治至上主義的に政治斗争を斗い抜けば良いという事にはならないだろう。吾々が個別斗争を徹底的に斗い抜き個別特殊矛盾から本質的矛盾を追求する中で帝国主義者に迫る質を引き出し、安保・沖縄の全局の斗いを保証していく部隊となり得るのではないか。

現在、我々の斗いは権力・大学当局・関東軍等の一本化された弾圧と正常化路線(古田体制強化(帝国主義大学体制強化))の中にあって後退を余儀なくされているのだが、その中で我々

は何をなすべきか。それは先ず、個々の不満・学部内の具体的な諸問題等を明確に把握し、学内活動場所を獲得すべく学内合法組織(サークル・ゼミ・クラス等)を利用しつつ、その合法組織の強化・拡大を計る事である。場所的学内合法拠点(学内合法組織活動場所)を保障すべく強化・拡大を計る事である。又、合法組織それ自体では古田体制内のボツダム自治内のものでしてしか機能し得ないが故に、合法組織を場所的学内合法拠点の確立追求の中から非合法化する必要がある。

又、遠く藤沢の地にあっては、校舎の回りは鉄条網で囲われ、学内には職員が監守の如く徘徊し、各クラスには御用学生を配置し、学生をがんじがらめに支配する中でブレハブ監獄教育を行なう中で、愛国・軍国思想を注入するといった超反動体制がしかれている。その中において藤沢の学友自身が藤沢反動体制を打破し、粉碎しようとする運動を起しつつある。我々はそれらの運動を支援しつつ、連帯しつつ、藤沢の学友と共に藤沢校舎を解放していかねばならない。又、現在日大斗争を主体的に荷なってきた新四年生が卒業していかうとする中において、地区組織作成の命題がさし迫った問題として提起されるのではないだろうか。即ち、中央権力斗争を斗い抜く事によって大衆を流動化させ、左右両極分解をなし、戦略課題として感性化された大衆を党の総路線の下に集約していくという形では、それが為にどんなに激烈に斗いを組もうと、その地区には何ら力は蓄

積され得ず、それどころか今日においては自衛団等という形でその地区は権力側に集約されてしまう。即ち、我々が下手に動けば、その動いた斬跡上に自衛団等が組織されてしまう。この誤りは明確であろう。即ち、高度に発達した資本主義段階にある日本においては支配が多元化していて、超階層的な革命戦略は有り得ないし、中央権力所在地も設定し得ない。そこで中央権力拠点奪取・一点突破の斗いの中で帝国主義者に包囲セン滅されるサイクルより脱皮し、地区解放・総反乱の斗いを導く中で帝国主義者を包囲セン滅するといふサイクルの中から地区解放斗争の命題が必然的に導き出される。そういう中で、我々は中央権力斗争・政治焦点斗争を地区組織作成→強化→拡大という形の戦術利用として位置付ける。そこで我々は地区組織作成→地区結合→地区解放・総反乱を導くべく地区組織作成へ向けて新四連協を作成しなければならない。

叛軍斗争勝利総決起集会に寄せて

第二・第三の小西を東京行動委員会と
断固として連帯する。

一月二五日 日大全共闘 経済学部活動者会議
同志諸君！ 今日帝国主義者は、帝国主義産業体形強化・確

立を基として、国内の総ての戦略配備体制の強化・確立を急いでいる。その中で彼等は帝国主義治安戦略配備体制進行を裏付けとした末端支配機構の組み込みを完成して行っている。だからこそ、今日我々が単に冒險的に、何らの種まきを成さずして闘争を進行させるならば、その行為自体が帝国主義諸体制確立のレールに乗せられて行くのである。我々日大全共闘は、全面の流動化を十月以降権力弾圧を眼の前にして、その経験的必要性の中から求めた。今日の全軍労の同志・三里塚・芝山の同志も又、必要としている。

然し、だからと言って、単に無媒介的冒險的な闘争を組むものであつては決してならない。我々は今こそ歴史的特殊状況を無視した「一般原則論」を語るのでは無く、「地区解放・総反乱」へ向けて一步一步確実に歩を進めて行かねばならない。そうであるが故に同志諸君、今日現われて来ている一時的な軍事的な敗退状況の中で何を残し、かつ、何を生み出し、帝国主義者の我々に対する包囲セン滅網を逆転せしめるのかと言った問題として、我々は今日の闘いを設定して行かなければならない。

さて同志諸君、今日我々の手には長期的な全面の流動化を保障する材料は何もない。ない許りか、帝国主義体制強化・固定化の材料許り山積みされている。同志諸君、今日我々は全面の点としてしか存在し得ていない。ではどうするのか同志諸君、何をすれば良いのか同志諸君。我々の闘いは幻想なのか、

革命は夢想なのか。決してそうではない。だからこそ我々は安保・沖縄を中心軸として、かつ、大学に於ける帝大体制解体の導き出しの中で目的意識的に追求し始めた地区解放・総反乱の方向をもって、至る処へ、至る処の同志へ、支援と連帯の闘いを展開する必要がある。その中で、その流動化の中で、至る処に地区活動者会議を創出し、地区活動者会議を媒介として、末端支配諸機構に於ける活動者会議を創出し、かつ、普遍的矛盾への肉迫を、多くの闘う仲間の力をもってした流動化の中で成して行かなければならない。全ての同志諸君、地区活動者会議創設、末端支配諸機構活動者会議創設、七〇年代地区解放・総反乱に向けて全ての戦線を整備せよ。

第二・第三の小西を叛軍闘争勝利総決起集会勝利！

安保・沖縄闘争勝利！ 地区解放闘争勝利！

帝国主義大学体制解体！ 学内秩序集約！

古田体制打倒！ 日大アウシュビッツ体制打破！

地区活動者会議創出！ 末端支配諸機構活動者会議

創設！

七〇年代地区解放・総反乱！

日大神田地区よりのアピール

日大全共闘 経済学部活動者会議

一・二六

神田市民の皆さん、学友諸君、日大全共闘神田地区より、連絡を呼び掛けます。

市民の皆さん、学友諸君、六九年二月以降私達は三崎町校舎奪還闘争・解放闘争を展開して来ました。その中で佐藤政府・日本帝国主義者は、今の大学を是が非でも、専門労働者養成と、軍国・愛国思想注入を目的としたものとしたいが為に、そして今日、至る処で闘いを起こしている労働者・市民の人達と校舎利用（討論・学習・連帯の場としての利用）をもってする連帯をさせまいとしてバリケードに対する弾圧と、二度とバリケードを作らせまいとする弾圧を加えて来ました。

神田市民の皆さん、学友諸君。日大全共闘は、学内の合法的な活動場所の保障を求めて（自治会活動の保障）六八年闘争を開始しました。

だが、今日の大学が六〇年安保・六五年日韓条約を境として成された日本帝国主義の海外侵略に依じて、その体制再編が成されつつある現在、合法活動場所は狭められつつあり、かつての活動場所保障を成そうとする事が、そのまゝ拡大と言う事と

なり、それを求める事は、合法組織が当局・権力側から見れば非合法組織となる事を私達は知りました。そうした中で経済学部
部の同志は闘争委員会を作り、非妥協的に六八年五月二一日三
崎町校舎地下非合法集会を開催したのです。

私達は確かに学内活動場所保障要求の闘いを展開して来まし
た。然し、今日私達の前に現われた矛盾が帝国主義大学体制強
化の一環として現われたものであり、その体制変革なくしては
私達の矛盾は解決されません。だが、だからと言って私達はそ
の変革されるのを待っていたり、あるいは街頭闘争許りやって
いれば変革されて、私達の矛盾がなくなると思っていま
せん。今日の矛盾が帝国主義大学体制強化の一環として現われたなら
ば、それを知った時から私達の永続的な学内秩序集約の闘いを
展開すると言う決意を固める許りです。その決意の宣言こそが、
私達のスローガンである帝大体制解体なのです。

最後に私達と同様に多くの人々が自分の生活基盤で闘いを起
こし、続ける様に訴えます。帝国主義安保体制強化の下に自ら
の土地を奪われ様としている三里塚・芝山の農村の人々、職を
奪われ様としている沖縄・全軍労の人々、帝国主義産業体形強
化（大企業の下に一本化等）の下に職を失なかうとしている中
小企業労働者、動力車労働組合の人々、全ての人々が全局面の
闘いを訴えています。私達は以上の中から多くの人達が自らの
生活基盤に於ける闘いを展開されん事を訴えます。その事こそ

が私達日大に対する弾圧の分散と、帝大体制解体の勝利的展開
につながるものだからです。

神田市民の皆さん、学友諸君、日大全共闘神田地区は再度連合
の呼び掛けを送ります。

安保・沖縄闘争勝利・地区解放闘争勝利！

帝大体制解体・学内秩序集約！

古田体制打倒・日大アウシュビッツ体制打破！

地区活動者会議創出・末端支配諸機

七〇年代地区解放・総反乱をもって各末端支配

に活動者会議創設！

諸機構に於ける闘いの諸体制解体への肉迫を！

七〇年代地区連合創出！

全共斗運動の今日と我々の方向

三島活動者会議

一、全共斗運動の今日状況

今日、全共闘は解体しつつある。それは、(一)大学立法Ⅱ機動
隊による全共斗の武装解除、(二)諸派への分解、の二点をもって
解体しつつあるといえる。それは「帝大体制解体」の提起によ
り内在化していたのだが。

今日の全共斗の状況を生み出した「帝大体制解体」の持つ質とは何であったのか検討してみる必要があるだろう。「帝大体制解体」の持つ質とは、自然発生的個別闘争の最終到達点であり、同時にその意味においてグローバルな社会的視野と政治闘争の獲得へと飛躍すべきステップでもある。つまり全学連運動という形で進化した全国政治斗争が一方に於いて存在する中で、その影響を受けつつ、個別から発生した（ことが重要な総括ポイントになるのだが、後に展開することとして）全共斗運動は「民主化」という戦後民主主義イデオロギーを基調とした質をもつことによって、学生大衆の自然発生性を全面的に引き出し得た。しかしバリケードストライキという暴力の形態は、その暴力の質は、いやその「質」由えに、戦後民主主義との間に「形態と質の矛盾」を存在せしめることとなり、その矛盾の展開の過程として、暴露されたものの質に大学批判論を媒介として「帝大体制解体」が提起される。そして「帝大体制解体」そのものは、帝国主義国内戦略配備としてある今日の大学を根底的に拒否し、その秩序を攪乱し、奪取していく方向を持つものである以上、帝国主義政治権力との全面的対決は不可避のものとなり、その中で、自からを政治斗争主体へと形成していく方向を内在化させているものである。その中でのみ「帝大体制解体」は完結しうるものである。だからこそ、政治権力は大学立法に機動隊によって血まなこになって、全共斗に対す

る弾圧を遂行し、完全とはいえないまでも、ほぼ成功したのだ。先にのべた方向を持つ「帝大体制解体の全共斗」が政治斗争主体へと自からを形成する方法を、全共斗の解体にセクトへの分解としか、はたし得なかったのは、なぜだろうか。先にのべたとおり、六十七年羽田斗争以来の全学連運動という形をとった全国政治斗争、更にいうならば、日本革命の型の規定とそれを綱領的存在とした党形成を中心とする運動と、個別的自発発生的に開始され「帝大体制解体」をステップとして「全国性」「目的意識性」「政治性」の獲得へと向う全共斗運動の関連と結合はどう進化したのか。まさにそれは全共斗のセクトへの分解として、全共斗の活動者諸個人に、日本革命の型を選び、それをもって斗争決意をする作業としてしか進行しなかった。そこには党運動と全共斗運動の運動的結合はなかった。その結合こそ「党の指導」と呼ばれるべきものであるのに。それは、今日の諸派の運動の「質」からきている。日本革命の型の規定と党形成へと一切を集約する運動は、あの革マル派に典型的に現われているように、大衆運動の政治への形成は、運動としての形成でなく大衆諸個人に革命の型を選らばせ、決意させること、大衆諸個人の革マル化・セクト化でしかなく、大衆運動のセクト分解「革命的」ですらある。我々の問題意識はそうではない。全共斗運動の運動としての「政治性」「目的意識性」「全国性」の獲得の道をさがすことであろう。それには全国性

獲得の道、全国全共斗連合の検討から始めなければならない。

二、全国全共斗連合に關して

九・五全国全共斗連合結成大会は、その実体からいえば、第一には、全国全共斗「八派」連合結成大会であり、第二に野合的連合大会であり、したがって第三に、思想的にも運動的にも「結成＝破産」の大会でもあった。それは準備過程においても、当日の構成配置、運営においても、一見して明らかであった。そのやり口は、見えすいた姑息なブルジョア・ブラグチズムのそれであり、その心は、セクト・エゴイズムであった。大会は、全共斗大衆の一人一人が抱えている問題意識に我々は何のため、に斗かい、何を求めて、どのように斗かっていけばよいのか、という真摯な問いに対して、いささかもたえる用意がなかった。それは、すべてが出来ているという意味で、あたかも「総評大会」であった。

△京大全共斗 バルチザン軍団V

まさにそのとおりである。全国全共斗連合は、僕たち個別全共斗の斗いを押し進めてきたものとは全く別のところで準備・結成されたものだった。それは当然、僕たちのもっている矛盾、どうやって「全国性」「政治性」「目的意識性」を獲得しうるか、に対して回答し得るはずがなかった。我々にとっても矛盾の止揚の方法は全国全共斗以外にはない。しかし個別的運動の外側から、上から下に、八派連合という形で結成された全国全

共斗は、我々にとって役にたたないばかりか、反革命的である。僕たちは、今日解体されつつある個別全共斗のもつ矛盾、帝大体制解体を提起しつつも、全国性を獲得することなく、個別的・一大学的解体へと後退しつつある状況を突破しなければならぬ。その意味において、京大全共斗内バルチザン軍団・日大全共斗内連合体グループの実験を支持する。我々は、問題意識の同一性の上に、八派とは別のところに、全国の小グループと連合し、戦線を構築しなければならない。

三、三島の現状

三島も二月十六日機動隊導入以来、先に上げたふたつの状況、武装解除とセクト分解の方向をもって斗争委員会が解体しつつあるといえる。セクト分解の状況は、八派へ分解する程の力量がなく、全国全共斗（八派連合）の指導下にあるノンセクト・グループという形態をとっている。一月十七日の日大集会、十八日東大一周年に結集した三島四十人の部隊は、スケジュールに直接的に対応しただけであって、その部隊の持つ矛盾の止揚の方向を持つてはいない。それは結集した諸個人が、参加することを目的としていたことを見ればよくわかる。それは、過去の我々の運動、決意とスケジュールの結合の今日的再現に他ならない。我々の目指すべきは、そんなものではない。「帝大体制解体」によって導びき出された全共斗大衆の内に胎動してい

るもの、「全国性」と「政治性」を、全面的に引き出しうる運動の質、それこそ我々の求めるものなのだ。「帝大体制解体」を再び「古田体制打倒」焼後民主主義の質に引きもどすあやまちを二度とおかしてはならない。スケジュールと決意のサイクル運動の息の根をとめて、我々の新たな運動を開始せねはならない時期がきているのだ。三島は発生当時からノンボリ的要素が強く、地域性も手伝ってきびしい党派運動の経験がない。セクト的ノンセクトになりきれないことにもっともよく表われている。しかし、逆から見れば外部からの影響が弱いために真に内在的要因以外は運動になりにくい強さもある。東京に空気をいれに行くことなどやめる事だ。我々は、今我々の持つ矛盾の展開からはじめるべきだ。時間はかかっても、そのみが我々に勝利の展望を与えることをおぼえていよう。

四、我々は何から始めるか

まず総括である。日大斗争を中心にすえた全共斗運動の総括を我々は必要としている。それは総括一般であってはならない。新たな闘い、「政治性」「全国性」「目的意識性」を全共斗において獲得しうる方針提起のための「総括」なのだ。総括と、そこから導びき出される「仮説」としての展望を実践の中で確認し、修正する事をもって次の仮説をたてていく我々の実験を行なうことなのだ。三島でのその作業は、「活動家通信」を通

して行なわれるだろう。「活動家通信」はアジビラではない、それは理論実験の場と同時に、問題意識を同一にする活動家を結集する組織者としても働くだろう。そしてそれは三島から全日大へ、全国へと拡大する方向をもってひとつの連合戦線を、八派とは別のところに登場せしめるだろう。その実験は、我々が三島から始めなくてはいけないのだ。

すべての活動家諸君！ 目的もなくスケジュールに集まる事のつまらなさを君たちは知っているはずだ。死を決意させられる馬鹿らしさも知っているはずだ。あの悲愴なアジテーションもヘルメットはかり群るカンパニアにもあきているはずだ。我々は、諸派の動員機関でもなければ、兵隊でもない。我々と共に第一の実験「活動家通信」から始めよう。「活動家通信」はまもなく君たちの手もとにとどくだろう。

三里塚斗争へのアピール

日大全共斗経済学部核会議

三里塚・芝山の同志の頭上により恐ろしい奴が今日の問題の後に待ち受けている。帝国主義治安戦略配備体制の強化はより普段に続いて行くし又、帝国主義者はその事を目的意識的に追

求している。安保体制解体は決して単なる安保条約粉砕ではないし、基地拡張阻止斗争それのみではない。その具体的な生活保持要求は、その斗いは、非妥協・実力斗争を媒介として、より本質的な矛盾へと、即ち、帝国主義治安戦略配備体制解体へと肉迫して行っている。その事を認知するならば、今日の三里塚に於ける斗いを、単に軍事空港設置阻止そのものとして捕える事なく、帝国主義者による追打ち的強化作業（軍事道路等諸施設拡張）を先取的に捕える中で、永続的斗いの方向を、帝国主義治安戦略配備体制解体・共同生活姿勢（共產主義的生活姿勢）を今日の斗いの中で導き出して行かなければならないし又、その普遍的矛盾は帝国主義治安戦略配備体制解体への肉迫と、永続的な組織的団結の導き出しをなすものとして今、三里塚斗争を位置付けなければならない。

今日、三里塚の同志が要求している地区解放―総反乱を我々自身の基盤に於いて明確に展開し得ていない事を自己批判的に総括しつつも、我々は今三里塚斗争を自らの斗いとして受け入れる中に於いてその「阻止を、より普段なる阻止を、そして解放を」の質を受け継ぐ中で春期日大解放斗争への準備を開始せねばならない。

「阻止を、普段なる阻止を、そして解放を！」

三里塚帝国主義治安戦略配備体制解体 安保体制解体斗争勝利！
労働学の内実をもった共斗によって強制測量を実力で粉砕せよ！

三里塚軍事空港実力阻止！

帝国主義治安戦略配備体制解体！

七〇年代地区解放―総反乱をもってした諸体制解体への肉迫を！
春期日大斗争勝利！ 学内秩序集約！

出入国管理体制粉砕に向けて！

日本人民は過去に多くの犯罪的な歴史の蓄積をもっている。

関東大震災の時の朝鮮人虐殺・日朝併合・第二次大戦には中国・朝鮮人民を本土に強制運行し、炭坑労働者等として働かせた等々。そして再び日本国民はその犯罪の歴史に新たなものを積み重ねようとしている。六九年に政府自民党よりだされた出入国管理法・外国人学校法案がそれである。出入国管理法はその犯罪的内容についてはここに述べないがその法案は今三月に再び衆院に上提されようとしている。

昨年、入管法案が我々の前に提示された時、その粉砕の闘いは出入国管理行政の中枢である大村収容所に対する攻撃デモ・神戸入管事務所に対する強制送還阻止の実力闘争・在日外国人を中心とした新宿西口広場でのハンスト闘争・全国各地での朝鮮問題討論集会という諸々の形で闘われる一方、大学闘争が全

国的に高揚する中から東京・大阪で多くの労働者・学生市民を結集して数波にわたるデモと集会がもたれた。このデモと集会は多くの人々に入管法案のもつ意味を提起する契機を与えつつも、しかしながらカンパニアスケジュール闘争にしか終えず、入管法案が国会で廃案に決定されると数多くあった大学実行委員会・市民の運動は次への闘争方針を提起実行できず十・十一月の政治闘争の高揚の中で自然崩壊してしまった。この崩壊は我々の闘いの対象が出入国管理法である限り、法案が消えれば闘いが消えるのは当然であった。

出入国管理法が提示し、在日朝鮮人中国人が我々に訴えるものは日本の社会体制に蓄積され現実に動いている他民族の抑圧であり差別である。他民族への抑圧は日本国家とアジア人民との関係としてのみ存在しているのではなく、日本社会の現状と歴史にこそその根底を見いだすべきなのだ。「他民族を抑圧する民族は自由でありえない」それ故に出入管法案にかかわる闘いは民族間における差別、日本人の中の差別（未解放部・被爆者・低賃金労働者）日本社会を支えている差別構造そのものを解体する志向をもったものとしてなされるべきだろうし、地域大衆の中に土着したものを闘いの基調としてゆかねはならないだろう。

現在、東京各地区で地区実行委員会を構築して闘いが始められつつある。地区実行委は地区で出管体制粉碎の系統的専従的

にない手として活動し、その地区にある多くのフラクと連絡し合いつつ闘いを展開しようとしている。

以上の入管闘争の基調を自らのものとするには、今まで入管粉碎の闘いの先頭と多くの任務を在日外国人主に革青闘の同志にまかせてしまっていたという我々日本人の闘い方を改めねばならない。出管法が成立する見込みのある現在、このことは緊急課題として我々に要請されている。

新らしい、素晴らしい同志へ！

素晴らしい同志諸君、七〇年度日大解放の戦列へ加わるであろう同志諸君！ 経済学部活動者会議は、君達を大歓迎します。例え、三崎町校舎が冷たく君達を迎え様とも、当局が金をガツポリ稼ごうと待ち受けていようとも、右翼がブン殴ってやると指を鳴らしていようとも、僕は君達を素晴らしい同志として迎えます。

今日、君達が日大生として一年間を暮らすべき藤沢校舎は東京から二時間余もの遠くにあり、便所は崩れ落ちそうで、ブレハブで、何よりも君達の動きを一秒も見逃すまいと教職員・右

翼関東軍が巡回している所です。そこで君達は一年間を暮さなければならぬ。経済学部活動者会議はその様な状況下に君達を迎えなければならぬ事を残念に思います。

右翼・教職員はその様な状況下に君達を置く事を僕達の所為にしてスマシているかもしれない。然し、断じて違う。金をガッポリ儲けて出し渋っているのは彼等であり、右翼・機動隊をもって僕達を追い出したのは彼等であり、今日の寒々とした日大状況は彼等が僕達に「考えさせまい」「動かさせまい」として作り出したものである。君達はやがて「ブレハブ監獄教育状況」を目の当りに見るだろう。そして怒りを感じるだろう。その怒りは進学々と全てに迫いたてられて入った大学の現実のヒドサへの怒りであり、自分への問い返しであらう。

まず、経済学部活動者会議は君達が日大をうけられた事に対して大きな喜びを感じます。もし君達の回りの者が「ボン大に入るのか」と君達を馬鹿にしたならば、僕達はこう答えるだろうし、君達も答えてほしい。「君達はボン大を素晴らしき大学にする決意もないのか」「君達は今日、大学へ入る為により勉強する事が如何に犯罪的な事かを知っているのか」と。例え、当局が、校舎が、君達を冷たく迎え様とも、右翼が日本刃を用意していても、僕達は君達を素晴らしき同志として迎えます。

日大全共斗経済学部活動者会議

△ 追 記 V

連合体Ⅰ号第四章・地区解放に關しての部分で我々は地区の問題に關して充分に語る事が出来なかった。そこで、六九年度地区へ配置された同志・或は地区に於いて現実に闘いを展開している若干の同志の経験的総括を学ぶ中から、再度より綿密な問題提起・路線をここに導きたい。

今日、日本帝國主義は産業体系に於ける垂直分割を行ないつつ、末端機構に至る迄の支配を完成し、全てを帝國主義体制下に組み入れつつある。ここに於いて連合体Ⅰ号にも書いた様に末端機構に於ける矛盾が発生し、それは闘争過程に於いて、普遍的矛盾に肉迫し得る素地が用意された事をも意味する。

帝國主義体制下に於ける日本解放闘争を語る場合、末端支配機構に於ける運動の提起と末端支配機構の運動の発展、かつ、普遍的矛盾への肉迫と言う問題を抜きにしては語る事が出来ない。

さて、地区の同志諸君、今日吾々の回りには、あらゆる矛盾が累積されている。垂直分割下に於いて放出された労働者同志・収奪を受けている労働者同志・都市・基地公害を受けている

市民同志・農民同志・帝國主義教育体制下の学生同志、あらゆる階層へその矛盾は降りそがれている。

然し、我々の末端支配機構に於ける活動者会議は余りにも少ない。そこで我々は、連合体を目的意識的に追求し始めた活動者会議は末端支配機構に於ける活動者会議創設へ向けた中心核会議（この時点に於ける中心核会議とは客觀的に見れば有志会議）Ⅱ一部の同志は労研と呼んでいる、を創設し、その部分が末端支配諸機構へ入り込み、活動者会議（末端支配諸機構の諸矛盾を要求課題としつつ）を創設し、かつ他にも散在する末端支配諸機構の活動者会議と連絡を保ちつつ地区に於ける各活動者会議の中心核会議（或は代表者会議）へと発展させていく。そう言った中で地区連合体を創出する。

以上は地区に於いて、「三里塚・芝山」の様に、共通した課題のない部分に於ける地区的連合体の創出路線であるが、「三里塚・芝山」の様に、一定地区に於ける、共通した課題の下に、地区解放闘争を展開している部分では、運動を通じた、普遍的矛盾への肉迫の中より、永続闘争を提起し、普遍的運動提起によって、より広範な部分に於ける普遍的命題の確認と連合体への肉迫が主要命題である。

付 記

十一月一日発行の連合体草案内容に関して多くの学友の指摘に基き以下の通りに変遷する。

一、「スローガン」に関しては以下の通り

安保・沖縄斗争勝利！

地区解放斗争勝利！

帝國主義大学体制解体・学内秩序集約！

地区解放拠点奪取！

一、「解放に向けて」に関して

フ・ラ・クという言葉を支配の末端に於ける活動者会議と置き変える。

五頁の上段の戦線統一を目的とした連合体を成立させたを戦線統一を目的とした（限定された）統一行動体を成立させたと置き変える。

五頁下段の運動を媒介とした革命（中心）理論の導入・進化成立を運動を媒介として導かれた普遍命題の進化・確立と置き変える。

即ち、フ・ラ・クの小組化である。を即ち、連合体の確充である。と置き変える。

小組とは、各職場・学園……日本革命党（共産党）である。を削減する。

一、六頁十・二一総括に関しては運動の表面的な現象面的な総括でしかないので削減する。

スローガン

養成・配置・連合

集中・提起・分散

情報交換・連絡・連合

安保・沖縄斗争勝利！

地区解放斗争勝利！

帝大体制解体・学内秩序集約！

地区解放拠点奪取！

最後に、中心核会議より各活動者会議へ向けて。

各学部活動者会議に於いて集中―提起―分散の中で検証し、以上の路線・組織論を総批判する必要がある。そしてより進化する事を提起する。

アウシュビッツ体制下の同志！

ブレハブ監獄教育下の同志！

地区・末端支配機構の同志！

この経験が、この言葉が君達に利用されうるならば！

一端信頼し、団結を誓ったならば、如何なる状況にあっても団結し、同志に依頼されたならば、必ず実行する。同志を信頼してし過ぎるといふ事はないし、信頼に答えて答え過ぎるといふ事もない。

同志の問題はみんなの問題であり、みんなの問題は同志の問題である。